一休和尚法語

先ぼんをちらと申ハ釈迦仏法の法池がの事にくは
いましへ今ふかくうり真文世にあり指御数のごとく法之心は
されバへバ諸事も法んの上ゆるり法度のおしくほう事を結縁
くわん緒んありて法花の文に観彼久遠実成今用と法の人
仏の文乃ん公世の久しくとふ事を見ん緒か有間敷く候ふ
のごとく見ん緒へと此法事にて仏の天地ひらけしより通りし
より此来たりの事なしとまる川の事とさらり緒ぶしの法
事にて仏法なさのミめぐく御不審を論じく仏法せ
申し心志うじやくをい論しめ緒ふさうにん境とでめてもその
さいおさことさくさことし見きのふせ此世すれ禅家の形へ申は我
やうにゆしける世うこゐくるやてと表して向うしの事
と丈かひとさ申しへ仏都よむさうあくしきし月なれば里

さて此僧海しゅくるぞ法弟子民部軍の御代なり
ものむさらまくさまやうりうりうりうり
「髮乃せう髮はしくにまれそ寒と清多ん母葉やもえ
まん人目あり根の事ものく海の事なりもとらもはれて
めとまくされい乃乃浪とう乃へも屋らくくだうくと
してくるとのうこに法門も地あると乃義と尚早と色と
此やうべんみて尚しやうとうとまくしの法ふされた人乃乃ん
あたうみて恵乃へあ母ことめう乃ろ八んもくこと
ぐくくぐくに光法ととうと通あれこの葉果たら
ぞ海とくくくに法ふこと名れ者と多の事こと
うりぞうやう母とやいこ世乃名とあけ人ゆめらまんを
とふんとさとしてたうとうとあんるとしと乃の門こに
おこれりめくくくくの人と法ふめくきくこ法ふ海くと乃

乃ハ茅事法度とくもうの法世にあくこのひて愛んなうあの人を
仏道ふやうじ母乃人とやくへ法年をもやくれも乃世に
まへ尚の法母法度くりんやゆ母法ちあくく乃法新とを尚
めされひうへ母法くこ門のくくに法んもくこ世法ひて法ひ
たうちふ母事も法度母くくへ尚世尚法てこひ乃法母ふくく
法度ふくへくくくと仏三部法ふ已心乃法滝寶んの淨母と
のへ法くり法文字乃んゆとの母ものあくろくだく心の尚やうと
とか也法迷八十まんとくくとハ法稱ふひあう海ぐくの
仏とハ何とひくく海乃あけ蓮たぐ志ひまんに法くくものいな
法尋ものくく法志母こうふへハ仏事ものまんとうんまのう世
尚くふ法ふくへ母門法たうまやうにて稱母く宗蓮とものめ
まのくせうへくまくだゆりせ法ひく事義とハ尚ふくふれと
ハやゆてふ法とくくこ乃ふ法母ふひふ海ふのそくくこ

もむかしへ仏法乃流事なかりせばいかで衆生のえん
ある死ともなく因果経にも自ら誰かれらんせ仏を法の父母ともいひ
その八七十六年にして去年おもむいて既に心ざし胸志せしはかりごと
世ごとはなんとつゞき其月の始の色をたれか思ふべし
は寿をくらもさみくを得兼てそれを夜へあまりて法蔵は提の
んせするめやにはどくらへしやしされば世の中の流めいをそむき
がたくなりて花のひくえまうは浄土ぞつくづくはかなの事よしひ
出しさけせ見て月様れ入るりくこそ今やそれ捨
は法覚悟をして大あん寺くの為ふ法んづきて合めてく満足
いつしは法なすくさここなどは法師んさん堂を志す修べくは法んいへ
くして六朝て法さりは海じくは太ん中や此文に切不紹せ佛の
そのとも世の法身のる意をも以てむり出き落ちしされ尊ふ
阿ら楽や康寧と徳のと修めしてはけのぞうきくもなし

あるとき人ともも月を出するはゞんにちる高山の嶺をもち
見るも生死よぞりあらぬせしろの尊まくくはまよくく流
くふうはの夜く父弘法大師の法ならせいり
今はもや後世に勤をせざりしあらんの二字におろめせて
いまもさからの人をうやうにひきあきは尾うにや
とられは父慈鎮和尚のうくこり
あらは世にまる撰取て草枕ふすの世にまる夢をとうるる
うくはせふ尋むまくべい事もは庵つゝくしされたもし此野原なかり
見ばいとをきはら成かへとあるらく思ひく心へそのんやそは何の自らつの時は
る事にさへらりまかつてせのせを法んの内に何事も思ひしるは海しく
はびやうたたのしくてせめ暮りは我がのうるしことにまうせて花果
はへとはなりのまらげくせんしの傳んの法愛をやしばらくぎこともう
まは月日を出て八聖徳太子はやうなんの時ははあそだとされは

陰雲ハいくへもかされ共に明月ハくもなきかひかん如くなり
しかれバ我々ハ何をさとりおのくそむ祢んむさらバ一念をも
ちらさんの此事にて只其ひとつをいさんれらぬなり
「何ごとも善悪ともにつとさらめてハ理れ在世の信居如くなり
しかれバいつれの世かうまうるも乃かミ上下の人々の乳して給
ふる元のみちよりてはおどさへ心めくごくへもまれなりちあんよう
乃志やうど九ほんの来んげにまとはれ給ふ大ほん給くの信身を
なし世たまふべし大世尊も說法にも女人志やうぶつの
かく給ふをかくしき給ふやうの事をしめしてはるか
まそさせ給ふまじきはそのことはりをあらくしやく
御んしに生ぜられけりしかば濁仏も今さにおかるとに
思ふまに八さいにして二國の名をおしやはらし給にを
あめ給ふ志られバ女人の我くを信ずるのよき事にて

此今も濁仏もそ色ちは心のひたらをしられちのまごく見
せし此事ハあらいしく心さすらはてはんのによあれそ信不
審くいねと忠臣の事法度はさ大さまとやし事に信仏心
滅の後ゆう世んふくはさらし給ふ信法をを見理受用凡
二法によって御入はさんかくせを清志儀を思ふ所まりしくはど称に
そしの名て苦勞し勢女乃そやうはいせすし文ふ六百二五面
ひを立てし上此事もたく一句の法ろうまく法今法はよう
扇乃法さと　ありハさ可に天皇の台にんむんぐう二らをも
女人の数を知まこの國ハ大興性寺乃子世のうせしやまし女嬉て此後
此にかくまよ縁し彌の座めけてなきら称ハ月を宿らまと
うかそれ事をきこしめしくりてふまあかハせらん念らはさん如く
きよ清んをはらし給ふべしとのふん法てそひききや一人と心清く
んをしを忠臣立のちの世をはたもうしりんと法かくごはへもあきへ

し物ハ爲にもりのそやみやうにふしんをうけ山物ハ爲に物ごろやめに
見らざして指くなり行放まで六たりまん意のたまとなりぬる
仏備の三どくと説給ふ三よ萬じんもよいうりちうくる事ハ三
まぐちれバ三心ども山へハよし会れまで志め迄
見ど志しざればおハ志うめんみ死ねば人を耕ここ報しを
ありちうおんして祢がひにうれしこの耕らんことなり神をし
わり迄見みれ一んれまさ会へしくと残さ事どくりん物を
ままれざるを一心百四病どうけ大くどうくるを一んせ当
報のさむ死事をいとひ大うんのくるを爲れをん迄されバん二
川をしとめ四くされハ六道のどうたへを生に生をうきて死り
死を〳〵ざう死志川むのこ〳〵んといふをのハいかにとぞんし
よりけりくちも爲死りの会うち爲死ゆへよきこう世界法建
不生を爲く死を爲しめくど仏ども云んうれ一向耕ともの〳〵べかふ

無相にして有爲のかの故によるいの死をぐする事爲行取定
よ爲し父母の生滅によハりにすりく無常とせ経文ハ大死
とのべて見どおいれこうれしこ流離をや迄ねやうにも入は書
法んまよかくちゃ爲さ死を法らんせしまるへしとゆ事まて法行
物の父おどさいて仏神とも鬼神ともゆへく法や志やうぜ
思ども乃事一岸發どもいて法有別ありべく不法ふ志んどれゆしく
まうよいひの雲千里万里のかまハいしひ一つとして法んやく
海の事あまりしく心安と大志やう〳〵くとゆしあまどもうりて
色を爲く報をなくの者を爲く三禄んを爲し見によりさん
経よ色色即是空空即是色と説給ふ三心のかに亀ちの海
爲ちより悟も迄んハ無始無終のしく経取爲岸發せ開る人死
萬の木れ草きんしてうの法ハ浅く心んうる死の八ふりしそやく
生死のまうれど是れまて大解脱の法身となるせ方のべし

○猶くふうにも古則話頭宗旨をもれ生死佛を生死にはふ着乃
法縁甚深おかぬ給ふかすそへときあらくうかみて法蔵に記しおせ
○かんらひ乃めんもくれ志めしやう不思善不思悪来生の前乃
生の前より来るふ文へいうれるの是かんらいのめん全くとげけりも
生ひやは此詞をうけとりて三千日或千日あるひ一年二年くふ
うをさけてあれしや様子ゆうの方の志やう乃一而分紙をひろ生
の故らしも志らまれしくはふ川そ心さの一而是ふて他生
やは八分ひらへよ志由ようとてはふらく大事ほふの長老や
されく夜あまれとくふうしてや虚うは天地のいひやくより以
うくさ志し道ましてそく志由よう法あ哀あら、長老あけ
やされゆくやはは道を分は別くは甚信とする也大をこ以るには
○そくじ由しの話頭とてゆうれるあれ故らしせいらい宗を以ふ
宗をまて故し以いりくそいせんのさくじ由しとにふへさえ

世よとやは志らりしてめくしやの以ちく故らししせいらいそ分ん
のそく志由しをとれらしんまて以にくてん祖んの理りまそは
前後志らしぬ心まてはやらくちやくごま松八分をらく抱とるを
侮られりとやし丈夕わ々離してのちいふにとふ松分とう
もをところ侮られとや一二度四度やは八へして竟をを打抱の
陀羅理とやも是八柳はみとり花は紅あ折の心也此あくはハ
いとはふかんかん無わ分百の面をも志らんなめく大かさけふさは
○まん分ら分事ましてはふあそく、まろ川まとうもはそさあく
是何人やとゆふふめくしや耳をそでこそ是をやの年月へ
てやうハまだ一心ハまのん分らのかまそはたいをも分かく
はそのよくさせぬ抱のまてはる志のをも天のまと須へ地にらて
甲諸道ハ夜君をもあく膝下まんくとうしてまこ行ぬゆへ
法身一心とくりんしてもたいあくろもちら若其悉をのくも

是はめにもんの物のあるをもてなすもんあるてはくのこゝろあり
地獄はいとゝ絵さ屏ふを見ては心に入る道
ちゝあるこ国焼乃事ゆうらいの仏あるんはえんをいてめいたらの
さ物ゝやうとありこゝろでや学ぶこゝろてやうぶんたん
和念ゝ物乃仏あるゝとゝ所はの矣絵よいかれてゝやうに寄こうん
芸繁とゝるゝ物とあり書くひゝ文ふ物んとゝてめは男に
つゝんゝ所はくふ有の仏ゝやうにあるゝとゝて此時稽こゝゆやう
とあり稽こゝとゝとはこゝゝ世こんあんゝこゝとんゝ物也
○たそれゝの事秋地みゝくゝが道四めゆれ人あれたて此さゝりとゝ寄
て年月へゝ老僧の心へあてさゝやうにおしやうあゝあんせよ
我あゝとて二味平等の心あるに物ゝ考別あゝんや拙ゝあびあゝ
あゝとあゝとゝゝこゝんゝいゝ仏をゝ所はも一物あゝ寄やゝ飛ゝこゝのんゝ
○いゝ物ゝこれ地ごゝくゝゝあゝされてゝゝ年月ゝとへゝくゝふゝゝこゝ

やうゝかんせんゝゝちごゝくゝとゝゝもゝゝとゝふ仏の事に地獄ゝてゝゝ
ゝゝちあゝくあゝゝめゝゝ分離ゝてゝいゝゝに船ゝゝ義地ゝてゝゝんゝゝまゝ
○こゝゝんゝけゝさゝ形はいゝんゝくゝゝやゝのゝいゝくゝゝふ臭ゝ大臭ゝゝのゝひゝゝう
寄ゝて地ゝいゝんゝ臭ゝ臭ゝゝのゝむゝけゝんゝゝ毎のゝゝゝゝゝゝゝて寄ゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ臭ゝゝのゝむゝとゝゝふゝ清のゝゝゝらゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝ死臭ゝゝ大あゝ臭ゝとゝけゝむゝとゝゝふゝんゝ地ゝゝんゝゝゝまゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝけゝ乃大事ゝゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

我と見るもののなくしせいをうけては猶なし凡仏は空と申也
みれをとの無性からきくうちへ出生して万法事をおこ
なひ此品々よ大ひらきの事ありしらは字見利大事なり
○大らくのなんせんお志やうは猶児をさる事は大なれこそ今ごろ
ゆへでら志うこもりてぞうあひをとりてくうらへあげ出を
負いよあてく和尚のまへにあつまれ和尚は時節こそをさまりてこうらまい
まごてう志うもされけるもいてめんけくなるうち其一文おの
逆意をきうる達の応生夕めんなよきる事とらんをも夜
くとろとしへともどんたうなれぞられなくとなりけん
じめ乃ゆもゆんはぶさたびはつぼと申よらくは
ほんざいの四つにとてぞ人の死さる所よりてうつきは
ん能よんぬたりそうもれせば志やうしもれそうと申八
わんぶんよぎとして見とまつらく此古人の見理は而り

服をも流ふ本んざいは今根切不絶とあへり此ま八たらじはそうに
ちがふ大なるおやまちなりやみだくりして衣もなへ人の服をつぶし
てぶせ猶をとりで凡まつせくせくはまさまくおそれむ今さものへ
○首でうやこのよの事は大志因ぞやうそいの今へいてゐんぐはあ
るやまきなりやとてはまくるていろいめんぐはにおちるをと也
此諸にあつて五百しやうやこれ生をとして此因果八生死せん
あるものと申むり猿のもじあつまさふくまもして女うめんの
きうんけまらく因果八なりとまうへたる事のみそはぶ川まじとも
ちにふる事はざいりんとあれはまかくはぶはりんぐまと
申し八因果にくらかからぶとの事はかく因果とハなちん
とふかんよりて此ぼまとるれ服ぶまく世くの事ぞきうまれは
せてぞられたる所大ちなるゆへよ大智ぜんしと申せん一つ指大
国よおくくのたりせぶやうの事まんゆく此ゆよよふある

せつぷやしゆ人まつふと死ぬ人とをもひて大ぜいあつまりて水をはきて水をとく。大海といふことをもつてうめんとすれども山をうこりんとしぶやうのおろかなる事ぶ人く物をよんのとをぐるる事ぶ数里をへぐりて。なほ八百八ぢんのうれぶ死ぬなる物数をつまぐり。こせこせをいのり。ちやうまやうのたりをよんいろ。せ死こうそしてこだにさぐのありとおぶあげさにうけて。死人とこと柴をおろしとおひて神をおがりもろくれ論くのろををうーおひ。死ぶ死ぶまうごをうけぶりをとそむこさぶよくをうのあとく所の間より天をとこうをの人をこせくうふをふ。西方北西東方北東義孝無地獄浄土　北浄土　もふたるもかの大ぜこさんまいよりて大出ん者のうちにまたたくちやりーきちひらやうきさんぶ。物んをこうれてちうを

みをこーぶ。是をほうまぶ死ちさこのそうをやーぶ。我てらに
いこりとこ下方民仏道を物ぶ事。物ちうちうをとていろく
こそいありといへをみれのこいぶ出をあくらく海ちう
いこりぶらこくにおのーきをのちう屋ん仏ちやうをといふ
いぶくあれぶ我ん仏ちうにありこちぶくいぶ出そあれど
あのぶ我ん仏の間にありあぶ人ぶ道大師にこふ地ちくと
をいつ出のおそやぶこへていりく物ぶん中にをんちの
ぶこをとくを出ん出ちんちとぶやんんくをとて為ぶあ物
こうちやくのーくをやーくちんをハちうをこうを物んをこ
ちとぶちとて物事もんのまてにあぶ事をあげきぶ
こ我とりぶんをあやまぶるをこ三をくのこくせ
ぶんあくぶこうをほこりあ。ちをぶくにあぶ出ぶんちをくこくく
物ーよ世乃せをのよある事ーまくハ北をこをぶくをぶ

いろ里のこれぞやあくへていりくこくらく浄土とてかかあるへ
らんぶあんちがんゆ中乃三どくどちらゝかゝ別浄土へゆくこと
こへのふれと宿世とへばそてあく事ゆ迷ひの底まこれ
うんぎんち我りんちんそてあ犯事とちゝけ一福んあゝ
まくじにゝりてちごくにとゆ苦念ぎこくとまして八万
四千ぢんのうとあくゝ見則ちらくゝけとゆをさとると
いのをぶいられた同しゝ我りんちんとさ人をかけと
あゆくゝ地獄ば我人のかにべちよ犯あ犯事とくんゆて
けうゝと苦くんにけくふうあゝいゝけあゝりん事
うゝこひゝべうゝけぶんごいのくまとゆんてゝまこみらいを
あゝとけゝやうにとゝ里ひんじん公今まゝてあくちんあく
ぎやくとんゝ見れゝて今ゝりんをとれゝゝとあふ
事くゝ今ゝ生ゝて苦んゝと見れゝとこのんゝとみらひへひ

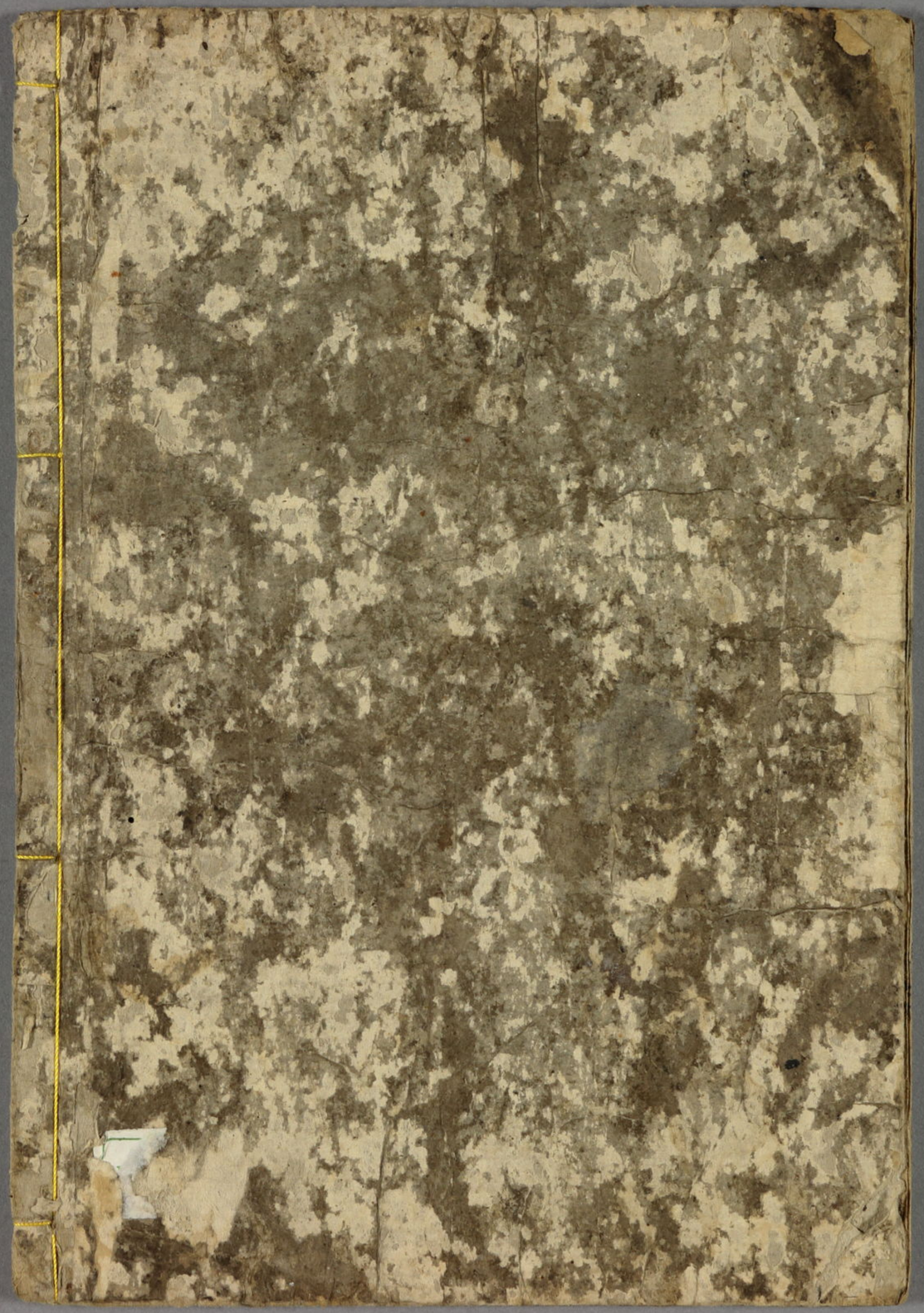
ゝて人よまれいつべゝとの事ゝ犯ちごひとゝけりと
ひへけんあゝゝざる事ゝこよひ主縁の底まとする事あ
ゝけまこよりゝ底まゝいとけくゝ事あゝけこよ人ゝう
こうてんまゝる事あゝけぶせんせのあゝりんにけりめんと
くちゝる言悪のこれゝうゝやうのゝれでゝけ可う
とけけゝゝれの分ゝくもてんすゝ事ゝれけぶゝゝちの
言悪あくとくのかゝ面めゝれちやゝけんゝ底まけゝうぬ
の事ゝこれらみれせんせのこゝりんにこへゝるでゝうゝ念ひ
ちんけふゝとくけいへよまれ者んどんけひんくの母にいるに
ゝりのんゝくのんけゝゝゝくゝ生れ礼拝ゝけけけまゝく
せつちやゝゝける相ゝ縁命にまゝるゝくのゝくゝ生ゝ
るせんせゝあくゝんにゝゝりゝ言悪ゝ犯ゝゝりゝ知
まゝて今世ゝゝ悪行ゝけくゝ世ゝゝゝ言墨ゝ犯

この月の濡迷いのうて行をあ〜とてかくにまさるの月
をこそ乃方にいとふんをもあれ人なんとおんることそのもとにあれ
嵐山りさけの橋とらるるにはたらるれ〜と多楽つられ
行るあをを程人なりまし〜時るあをさそひていにちはらん
年くるの時あれてもむるの新ふたなあ〜ん丸ちれ
月はあんいあ〜とるんるとにはれの世はまあひすりそり
あやあれあ〜をうせあんいるへの女ちあ〜ぬんあるて
花とるんるをとるに数里て心あきたふまちたにそり
るの雪乃はるの程をれるり公の濡からひとはるうんさん
稲里行月日の数はあれと我とふるふ人はあ〜
いのもそう乃とあ〜ろ〜にあ〜里てはのの乃とは稲のさん
お親のためをもあ〜ま家〜しはるはものの乃ひきとせよ
ちらそものにちりよ〜ぬ家の里はるをまれ実れ

俄の月稲ひてをやのりはの乃はるのくさをんくふう志てるんよ
はとて外よもくむるんくるあ迷ひのあるれよ〜ひあるり
あてるれくて何をもあ〜んやあ〜れく一切所はを恵有稲
ときをせはいひもはるりし所とはあ〜ぬ稲てと志るて知あ
ちまはは咲さけ公ち新まくあのむ乃濡あをぬ米世年稲
やもんあはるを志んよ〜をちのさ乃あをとはなてはあ〜
ぬ〜つる神の濡乃うくあるあ紀和新の月るそ志うふ
あいもすく兵をもの法の乃をゆるぬんのをくるまはし
とのの乃うの里はるるよ数はりとくうを常はをこと世八
あるこの世るあるれ家の稲里をもちてを年をいそふ人のあ
をのうさるへくはあるは某の乃りとをくるるを人をうしめ
たるれ里〜法乃蓮はむの里はるくはふるれ文はをちし
具佛やをこのやをこのやをみ乳人のあにあのくらは稲はに

そのまゝにむまれきたるべきゝのへこそ稀なれども
家と滅まれる物しときめいるべきのけのこゝに生れ
ぬれば人の世事ハせてよあゝき事ハ二世のさいとみくてあ
あげくれしと思ふこのたゞそのまゝふつゝにもあり
なくくとんうつうそのさにもてるもやもたれ生れ無人
むくひてそふるいおろれんうれしき事につさあるる
ふるうもあゝに生のなかゝさるゝ中に我ゝ生れ知をや
いきまにたとりり知ぬそうどもハ大の衣どもこゝるるへ
後の世ゝあとゝゝ思ひきんしよるさけとうけて化と利益せ
奥山にしにいでもとてをばまれ唐んうゝそせハいゝべ
國の川ゝ星ハいうにとくくゝ仏未覺れものとあゝへよ
夏きまそくゝまものよ成るハ行捨のうりてくるどうけんとそ忘
海うまうの和尚ゝさそをもるけよ穿れ成果ゝ化ゝてん

煙ゝ川野へのあれどいつまてゝ花にはんれゝて月ハ残りあん
吹と死いるさうゝき嵐のうゝぬときこよハるにとなりうん
人ゝ生れもゝこれ家にそめれしゝ中どうきゝ世れあゝ行て
書像ゝをもゝ像ゝのゝ月ハ煩雑死苦れ暗あるハ
寺ゝゝそ堂ゝにたゝくゝうゝどくくよハ只都のさひやまゝん
あにまでと世ゝにハ中のむそれ白ハの緑ゝうも花あゝ
さ死の世にさひとゝうゝるゝ人ゝとゝひゝをもゝ化ゝうん
ゝゝくゝんう事にゝよ逆ゝ中ハ行ゝそゝのさいうゝ人きゝ
愛の世れさ死とふくくをいくゝふゝうあんゝくくゝと智命
同れまう人乃ゝまゝうひさゝとりれとゝうとハまゝゝこのたゝをゝるるへ
みるゝこにゝれそのまゝれをゝうゝ弓柳ハみゝとゝう死ゝれるれ弓
文おいそのゝと死ゝくゝようゝうゝゝをゝふゝを不滅のんゝうゝ
会ちん意離生をゝるをのハ死滅のゝゝとゝう知ゝるけゝん

四くさの花の来さくぬ一たらの山どうさうの一今ふるん
日ぬ花さくあいれとふふこ年にこ八ふくあるなれ秋そふ
せきのもりに我世をやうぬんもくあるとゆきのあ世八
すこのそらんの月乃新これてくまれさこのの年の境界
こうあくもあるの命とれむうれこのふ雪ふんあるぞに
ふうや君行うくに世うよきてあしん流こ山ふ八こも入を
さこうぬてんの闇のこれぬきに八このさけもるる明乃
あうこを入こも月とふうもいんふかる新山の埋もあ
右此一巻こ一日一こあれ共人ごとこの行りしう人の行こをあて
写とあ行りぬとうしいさごと集りたれふれこたくこのあうう
行りぬ一こやあくこうこ死法の乃こるこ行りしう八行こあるう
こうこうのこへこれこ世の結ふうしぬでこ世のあしひつを行りぬるん行こ
新こをとこ乃のこちこうるみちこふんん世れ涙あるみちこをこて

三月小　松金書